

表現学習『千の風になって』

——平成一八年度の国語表現から——

一、二つの中心課題

ここで紹介するのは、平成一八年度に京都府立洛西高校三年生対象の国語表現（二単位）で行った実践です。この年の三年生は一〇クラス。その中の四、六、七、八、九組（I類文系クラス）の生徒が選択し、受講者が二四名でした。

ところで、「国語表現」という小教科は、同じ国語科でも現代文や古典等と比べて、「目的」も「評価」も、いや「教材」「授業形態・指導法」も漠然としているというイメージがあります。担当される先生方によって様々なやり方があるようですが、私は中心課題を二つ設定しました。それは、

一、自分を見つめて言語化する。

二、教材と現実をある程度対応させる。

の二点です。なぜこの二点を重視するのかを述べたいと思います。まず一の「自分を見つめて言語化する。」について述べます。

「自分の事は自分が一番よくわかっているし、それをいちいち

金澤 ひろあき

言葉なんかになくてもよい。」という生徒（そして大人）もいます。そして同時に、「自分の事を理解してくれない。」と悲しんでいる事があります。

この事について私は、生徒に次のような話をします。

「今まで君たちが接していた人は、主に家族や友人など。言葉を使って詳しく言わなくても、わかってくれる人が多かったと思います。高校三年生になった今、考えてほしいのは、これから出て行く世の中は、圧倒的多数の『他者』を相手にしなければならぬという事です。他者はあなたの事を知らないし、考え方や人生も違います。そういう他者に対して、『自分を正しく伝える努力をする』という事が大切になります。その一つの訓練を、この時間で行います。」

また人間は、「言語化する事によってはじめて、自分を客観的に見る」ことができます。

例えば、高校野球で有名な茨城県常総学院高校の木内幸男元監督は、このような事を言っています。

「高校球児は甲子園に行くと、たいていの子はあがる。あがったらどうすればいいかというと、『オレはあがっている』としつかり声に出して言わせる。あつ、オレはあがっているんだと気づく事で、今の自分を素直に認め、冷静に自分を見るゆとりが出てくる。下手に『あがつていいない』なんて強がり言う子はあぶない。」

こういう話を生徒に紹介するとわかりやすいようです。

それから言語化が大切なのは何かと言うと、言語化できる（文章化できる）というのは、「思考の枠組み」を手に入れる事なのです。言語化能力の無い者は思考できないのです。これは恐ろしい事です。情動（感情）、快か不快か、好悪のみで動いてしまします。いわゆる「キレる」状態になるのです。自分の状況や心理を言語化してみる。そのために客観的にふりかえる。ふりかえた上で冷静に行動できる事が、「言語を持った人間」の「知の力」ではないかと思うのです。この「知の力」を獲得してほしいのです。

次に二の「教材と現実をある程度対応させる」についてです。真剣に「自分を見つめる」事をする、高校三年生という一年間が本当に大切だという事が見えて来ます。クラブの最後の公式戦と引退。最後の文化祭・体育祭。クラブや行事は、洛西高校では大変盛んで、生徒の目は学校を向いています。そして、進路決定も大きな課題として直面します。これらの事前準備として使える教材の配列を工夫しています。

簡単に述べますと、四月、五月は0からの出発。「原稿用紙の使い方」と「文を書くための基本トレーニング」が中心です。「文を書きなさい。」と言われて、スナナリと書けるものではありません。それから、「自由に思った通りに書きなさい。」という言い方。一見もっともらしい言い方ですが、実はこれがどうしても難しく難しいのです。

「なぜ書けないのか。」この事を皆さんは考えた事がありますか。今、目の前で問題になっている事を直視する。そして、その理由を考える。これは教育の場で大切な事だと思っています。「なぜ、生徒達は文が書けないのだろうか。」と。私は現実の生徒達を見て分析してみて、理由を二つ考えました。

一つは「書く材料（内容）がない」から。もう一つは「書き方（文の型）を知らない」から。だから、四月、五月は「材料集め」の方法と「文の書き方（型）」のトレーニングをします。

六月は文化祭のシナリオ作成の時期にあたりますので、物語作りが一つの大きなテーマです。そして就職面接やAO入試などもありますので、「話す」練習もかねて、ディベートを行いました。（詳細は資料①を御覧になって下さい。）

二、「千の風になって」との出会い

こうやって、行事や進路になるべく対応するような教材を並べつつ、夏休み前ぐらいから三年生後半にかけて、「人生を深く考

える」教材を彼らに出会わせたいな、と思うようになりました。その流れにあるのが次の三教材です。

a、私版『千の風になって』（七月教材）

b、オハンロンちゃんへの手紙（二月教材）

テーマは「信じていたもの・大切なもの」について

c、良い人生とは（一月教材）

テーマは「何のために学び、働くのか」

本論のテーマはaについてです。この『千の風になって』を教材にしようと思った契機は、ある講演会で訳詩者である新井満氏の肉声を聞いた事です。あの頃は、まさか今のよう、プロの歌手が歌い大ヒットするとは思いませんでした。講演会のほうも、小説家・新井満氏のファンの人たちが集まっているという雰囲気でした。

ところで、世の中に悲しい事が起こるたびに、「癒し」「回復」という言葉が多用されています。しかし、本当に「癒される」「回復する」事。それは何を通じて行われるのでしょうか。そういう事を深く考えさせられるのです。

この詩は有名になりましたので、ご存知の方も多いと思います。アメリカの九・一一テロの犠牲者追悼会で読まれています。テロという暴力に対して、軍勢力という暴力で対抗したというイメージがアメリカという国家には強いのですが、必ずしもそうではない人達も居たのです。言葉によって励まし合い、癒されようとした人々が居たのです。私達はそこに希望を感じます。

アメリカでは以前から、いろいろな追悼会等で読まれていたようです。不思議な詩で、題もついておらず、作者も不明です。大切な人を亡くした時、残された人が悲しんだり、亡き人に呼びかけたり、あるいはまわりの人達が慰めるという詩は多いのですが、この詩は「亡くなった人が残された人に呼びかける」という形をとっています。日本では作家の新井満氏が『千の風になって』という題をつけて訳詩し、曲をつけてCDで出されてから有名になりました。尼崎の列車事故犠牲者追悼でも使われています。

ただし、『千の風になって』は、新井氏独自の解釈で、原詩を大きく改変している所もあります。有名なかえしのフレーズ『千の風になって』は、原詩では一回しか出て来ませんが、新井氏はそこを中心テーマにしているのです。（原詩は、資料②をご覧ください。）

授業では、原詩を生徒に紹介した後、「自分なりにこの詩を翻訳してみよう。」というテーマで書いてもらいます。その時の条件は二つです。

一、『千の風になって』以外の題をつける。

二、自分が中心テーマと思うものにしほって、原詩を大きく改変してもよい。

つまり、新井満氏が行った事と同じ体験をしてごらん、という事です。とはいえ、全く勝手な改変は困りますので、あくまでも原詩を踏まえさせます。そのためにまず「直訳」をしてもらいます。そして「原詩」の中心テーマを考えさせます。それか

魂の風

ら「作詩」という三段階を踏ませます。ここまでは、夏休み前に行った事です。

夏休み中に、こうやって書かれた詩をまとめて一冊の詩集にします。実際にその詩集の中から、生徒の詩を三編紹介します。なお、名前はペンネームになっています。

いつもあなたのそばにいます

今若 葉月

泣かなくてもいいですよ

私は墓の中で眠ってなんかいいんですから

私は世界中に吹き渡る風になります

私はダイヤモンドのように輝く雪になります

私は穀物を実らせる日の光になります

私は大地に降りそそぐ優しい雨になります

私はいつもあなたのそばにいます

たとえ姿は見えなくても

私の心はいつもあなたのそばにいます

だから

泣かないで下さい……

Nameless

私の墓をあなたの涙でぬらさないで

私の魂はそこにはない、私は眠っていない、

私は世界をとりまく全ての風となっている

世界が眠りにつく頃、私は雪の上をすべるダイヤモンドの輝きになる、

太陽が世界を強く照らす頃、私は穀物を育てる日光になる、世界が紅と黄でうめつくされる頃、私は優しい雨になる、

あなたがさびしさのあまり目を覚ませば、

私は静かに群をなして飛ぶ鳥になり、あなたの元へ行くこう、あなたが眠れない夜は、あなたを見守る星となろう、

私の為に涙を枯らさないで、

私はそこに眠っていない、私は消えていない。

瞳の奥に

ちきん

私はあなたの前からいなくなったのではない

瞳をあけて見ると私を見つけることはできない

けれど瞳をとじれば 私を見つけることができる

だからあなたが悲しみの涙を流す必要はないのだ

あなたが辛い時は 私があなたかく優しい風となり

あなたを包み込み守り続けるだろう

春は新しく小さな生命をさすけ

夏は太陽と共に光を導き

秋は静寂と安らぎを支え

冬は凍てつく空を押し上げ

朝も昼も夜もあなたが悲しみの涙を流すことのないよう

あなたを包みあなたの背中を押しあげよう

どうか 瞳をとじ私の姿をさがしてください

悲しみの涙を流さないでください

あなたを包み あなたの背中をおしてあげよう

三、『千の風になって』から書く物語

そしてせっかくここまで書けたのですから、同じ教材でもう一押ししました。自分達を書いたものをもう一回真剣に読み直しつつ、次の教材につなげたいと考えたのです。私はこの「読み直し」が大切だと思っています。一回読んだだけでは、しっかり理解できていない。一回目は表面的な意味をとっているだけ。二回目以降ではじめて深いところで理解が進んでいるという実感がするのです。現代文でも古典でも、私は時間が許す限り、生徒達に「再読」させています。この詩の場合、「読み直しつつ、次の教材につなげる。」とは、具体的にどうするのかと言いますと、自分が書いた詩をもとに、「詩から物語」を作ることができます。この方法は、詩だけでなく、俳句・短歌などでも可能です。

また、「俳句」「短歌」「詩」に親しめないという生徒には、これがおすすです。

『千の風になって』に話を戻しますと、次のテーマは、「あなたが作詩した『自分版 千の風になって』をもとに、その詩が書かれた状況を物語にしないさい」です。

条件は、

一、六〇〇字以上

二、時代・登場人物・場所は自分で設定する。

三、二については自由に設定してよい。英語の詩だが、舞台は必ずしもアメリカやヨーロッパに設定しなくてもよい。

そして、次が押さえるところですが、

四、詩の内容の解説にとどまるのではなく、「その詩が書かれた状況」（いつ、どこで、誰が等）を書いて物語化する事。

これをはつきりと言っておかないと「解説」だけで終わってしまい、「物語」まで至らないものも出て来ますので、特に生徒に強調しておきます。

書いてもらった物語は、全部を印刷して冊子にすると良かったのですが、この時は時間的なゆとりが無く、「優秀作」三作品紹介という形で生徒達に紹介しました。なお、この『千の風になって』の時もそうですが、私は生徒作品を生徒に返す時、評価・コメントを書くだけでなく、彼らの中の優秀作や心に残っ

た作品をプリントして配布し、全生徒の前で音読するという事を大切にしています。なぜなら、生徒が書いた文は、真剣なメッセージです。そのメッセージを教師は声を出して、省略せずに丁寧に読むのです。そこに対話が成立します。言葉が心に届きます。何よりも、「お互いがしつかり伝えた」「しつかり受けとめた」の関係になれるのです。生徒の作品に、心の底から感動し、泣けることがあります。

最後になりますが、この三作品を紹介いたします。(なお、作者名は生徒の希望により、記載しておりません。)

優秀作品 その一

「千の風になつて」

涙というのは枯れないもので、私はここ数日間ずっと泣きっぱなしである。忘れもしない一〇日前の夜、大切なあの子が死んだ。交通事故だった。運転していた私は奇跡的に助かったものの、あの子は助からなかった。事故がおきた瞬間、私はとっさに助手席にいたあの子をかばおうとした。しかしあの子は、私の指先をすすめて転げ落ちていくだけだった。指先に残された最後の感触は今でも消えなくて、まだ手の届きそうな所にある気がして、あの子が煙となって天に昇り、小さな骨を見た時も、私は実感がわかな

かった。しかし、時間がたつにつれてあの子がいなくていう現実が辛すぎて、声をあげて、子供のように泣く。朝起きて、部屋の中の子の思い出を見て泣き、夜は泣きつかれて眠る。そんな毎日だった。

そんなある日、夢を見た。あの子が泣いていた。手をのばすけれど届かない。ただあの子は泣きながら、私が泣いている事が辛いと言った。私がこうやって家で引きこもって泣いている間も、あの子は大地を揺らす風となり、すすくのびる穀物となり、きれいなまたたく星になり……。あの子の時間は決して止まっていなかった。止まっていたのは私だけで、確実に、世界は、あの子は、移りかわっているのだった……。

目覚めた私は泣いていた。これで泣くのは最後にしようと思った。久しぶりに外に出てみると、こちよい秋の風が吹いていた。大きく深呼吸して空を見上げる。ゆつくりと流れる雲、すいこまれそうな青い空……。思わずつぶやく。

“頑張るよ”

その時ふわっと暖かい風が吹いて、うれしくなつて思わずほほえんだ。

今日は少し遠回りして帰ろうかな。

優秀作品 その二

「彼のいる場所」

—ちゃんと伝えます。だから—

風が新緑の中を翔けぬけ、ザワザワと音を立てる。その中に一人の女性が俯き加減で進んで行った。

髪は漆黒で腰にとどくかというぐらい長く、東洋系の顔だちに髪と同色の瞳は、光を見出せない闇のような色をしている。

典型的な日本顔は、このアメリカの田舎では異質で、ずいぶん辛い目にもあった。しかし、彼女は幸せだった。彼がいてくれたから…。

彼女が目を上げると、木のトンネルの先に広い丘が見えた。そして、無数の墓石も…。

「おはよう。今日はとても大切な話があつて来たの。」

手に持っていた花束を墓石の前に置きながら彼女、雨宮洋子は口を開いた。

「あのね、私…日本に、帰ることになったの…」

言葉の口にしたとたん鼻がツンと痛んだ。

「私の両親が決めたの…。アメリカにいても辛いだけだからって。私…嫌…帰りたくない…ねえ…どうしよう…どうし

たらいいの…？どうしたら…」

洋子の頬を涙が滑り落ちる。手の甲でそれを拭い、彼女は墓石にそつと額をつけた。

墓石はひんやりと冷たく、まるで悲しみによる熱を吸い取ってくれているようだった。

「ねえ、私…どうしたらいいの…？」

彼女の涙声で墓石にぶつかり、吸い込まれるように消えていった。

—洋子

「誰」

言つた時点でもう相手がわかつていた。わからないはずがない、だってそれは…

世界で一番会いたかつた人の声。

—洋子、ここだよ。

優しい声の導くままに視線を滑らせる。

「マイケル」

彼の姿はおぼろげで、光に溶けいりそうなくらいかすかで弱々しかった。

—洋子。会いたかつた…。

「私も…って、なんでここに?!」

—ちよつと伝えたいことがあつてね。時間があまりないから、黙って聞いて。

言いたい事や尋ねたいことは山ほどあつたが、洋子はそれ

を口にはせず、ただ黙って一つうなづいた。

— ありがとう。…何から話そう…？えいと…君は、俺のそばから離れるのが嫌だから日本に帰りたくないんだよね？

洋子はこくんとうなづく。

— そうか…確かに俺はあの事故で死んだ。身体も墓の中にある…でもよく見てくれ、洋子。俺はここにいる。だからこそこうやって君と話をすることができろ。そうだろ？

洋子は、あつと声を上げ、漆黒の瞳をただただ丸くした。

— だから、泣かなくてもいいんだ、洋子が日本に行くというのなら、俺も一緒に行く。絶対離れたりしない。

優しい言葉が心にしみる。ありがとうって言いたいののに、口からは別の言葉がでていた。

「でも、姿は見えないんでしょ？ だったら…」

わがままだってわかっている、彼が悲しむことぐらいわかってる。でも、言わずにはいられなかった。…自分を殴りたくなつた…

彼は少し驚いた顔をしたが、クスツと笑うと、優しい微笑みを浮かべて言った。

— だったら俺は、風になるよ。

洋子の目が何言ってるんだというように丸くなる。口も同様に半開き。

— あ、いや、だから、えつと…俺の姿が見えないと不安だ

って言うから風になろうかって…ああ！でも風も見えないかい…いや、でも感じることはできるし…って、見えなきゃ意味ないんだって！

一人、頭を抱えながら自問自答をする夫に、洋子は思わず吹き出し、腹を抱えて笑った。笑うな！と顔を真っ赤にしながら叫ぶ彼に、笑いをなんとか収めた洋子が、でもまあ、と優しい笑みを浮かべながら言った。

「だったら嬉しい…風が吹くたびにあなたを感じることが出来るから…でも、風が吹いてない時は？」

— えつと…じゃあ雪、ダイヤモンドみたいに輝く白い雪になるよ。

「でももうすぐ夏になるよ？」

— じゃあ雨、大地に降る優しい雨になる。

「晴れてる時は？」

— えつと…これじゃキリがないよ…

…じゃあ俺は日の光になる。毎日変わらずに輝き続ける日の光にね。

満面の笑みを浮かべる夫に、洋子は、まるで詩人ね、と肩をすくませる。

願わくはもう少しだけこのままに…。

— そろそろ時間だ、洋子…

「え？ 待って、まだ…」

— 洋子。一つお願いがあるんだ。

「お願い？」

—このことを：死んだ人は、墓の中で眠ってるんじゃない、大切な人のそばにいつもいるんだってことを世界中の人に伝えてほしいんだ。もう誰も悲しまないように：

かすかに見えていた彼の姿が空気に溶けるように、少しずつ薄れていく。

「わかった！わかったからまだここにっ」

—洋子、俺はいつもそばにいる。

だからもう泣くな：

彼の姿は、最後に微笑みを残して、消えた。

しばらく彼がいた空間を眺めていた洋子は、目を閉じ、風を感じながら言った。

「ありがとう。私、日本に帰ります。そしてそこで、あなたの言葉を伝えます。きっと世界中の人に伝わるように。」

開いた洋子の瞳は漆黒で、澄んだ星空の色をしていた。

「ちゃんと伝えます。だから…」

だから：今は少しだけ

少しだけ泣かせて下さい。

優秀作品 その三

「風の幸せ」

「風になりたい」それが君の口癖だった。私が初めて会った時の彼女はまるでかごの中の鳥のようだった。彼女は私を、「自由に飛ぶ鳥」だと言った。

諸国を歩き続けた私は、吟遊詩人として数年前、とある貴族に雇われ、毎年冬になるとある小さな村に滞在した。私のその間の仕事はその村で療養生活を送っている貴族の姫の相手だ。この姫は幼い頃から体が弱く、十年以上家族と離れ、療養している。そんな彼女は私を「バード」と呼び、様々な詩や、旅の話聞いたがった。

「私も鳥ならよかったのに」

ある日、彼女はそう言った。

「あなたみたいにいろいろな場所を歩き回って、いろいろなものを見てみたい」

幼い頃からほとんど外に出たことのない彼女の願いだった。しかし、私から見れば、それはうらやましい感情だ。

「そんなこと言うものではありませんよ。あなたは満足できるほどの食べ物や、雨風を凌げる家、暖かい寝所を持っているではありませんか。それを捨ててまで、叶えたい願いのですか？」

「そうね。確かに私は恵まれているかもしれない。でも、その環境も私には何も感じられない。たくさんのおべ物も、ほとんど私の口には入らない。この屋敷も寝所も、私を閉じ込める籠と止まり木にすぎない。それでも私は幸せだと言えるの？」

確かにそれは幸せとは言えないかもしれない。しかし、それを持たない者からすれば、それは恵まれた者のないものねだりに聞こえる。根なし草の私は帰る家を持たない。ありあまる自由のかわりに、いつでも安心して寝られる家がない。そんな私に、彼女の気持ち全て理解できるわけもない。

自由に空を飛べる鳥は幸せなのだろうか。籠の中の鳥は不幸なのだろうか。外で生きる鳥は、自由のかわりにそれと同じぐらいの危険を背負っている。人に飼われた鳥は、思いきり翼を広げて飛ぶことはできないが、安全と生きるための食物を与えられる。どちらが幸せでどちらが不幸なのかなど、わかりはしない。

私達がお互いをうらやましく思うのは、おそらく、自分が持っていないものを相手が持っているからだ。彼女は私の自由を、私は彼女の家を欲した。しかし、私はそれをあきらめ、彼女は求めた。そして、私はそのことに気づかなかった。

満月の夜、その日は風が強かった。月も見えなくなるほどの真夜中、私は彼女の部屋に向かった。あらかじめ、その時間に来るように言われていたのだ。理由は聞かされなかった。

ただ来ればわかるとだけ言われた。部屋の明かりは消されていた。そして部屋には風が流れていた。彼女はいた。窓の縁に腰かけ、月のない夜空を背負っていた。

「危ないですよ。何をしているんですか」
私の制止を彼女は聞かなかった。

「最期はあなたに見てもらおうと思ったの。私、いろいろ考えて、願いを叶える方法を見つけたのよ」

彼女はそう言って縁の上に立ち上がった。

「私、これから風になるの。風になって、世界中を回るのがあなたよりもたくさんモノを見るのよ」

私は彼女がこれから何をしようとしているのかに気づいた。そして気づけば、それを止めようとしていた。

「ばかなことはやめなさい。自ら大地を離れることが、本当にあなたの幸せなのですか？あなたが死ねば、多くの人が悲しむのですよ。それでも良いのですか？」

しかし、彼女に私の言葉は届かなかった。彼女はむじやきな子どものように言った。

「どうして悲しむの？私はこれから風になって、世界のどこにでも行ける。どんな時でもどんな場所でも会いに行けるのに」

「そのような保障、どこにもないでしょう。」

「ええ、そうね。でも、保障された大地よりも、自由な空を選びたいの。私にあなたの大地に焦がれる思いを私が理解

できないように、あなたは私の自由への憧れを知らない。それなのに私があなたをここへ呼んだ理由がわかる？」

答えを見つけない私を見て彼女は笑った。

「その答えは自分で探してよ。次に会いに行く時までね」

そう言い終えると、彼女の体は後ろへ傾いた。私は急いでかけ寄り、手を伸ばした。しかし、私の手は風をつかみ、彼女が夜の闇に吸いこまれるのを見ることができなかった。夜の冷たい風が、私の頬をなぐさめるように撫でた。

彼女の願いが叶ったかどうかを確かめる術はない。ただ、結果がどうあれ、彼女はもうこの大地にはいないし、彼女自身後悔はしていないだろう。

彼女の死後、私は一つの詩を創った。彼女の想いをこめた詩だ。しかし、私はその詩を歌うことはない。私自身、この詩に共感できないからだ。この詩をどう受けとるか、どんな想いで歌うかは、私以外の誰かにまかせるとしよう。この詩を書き終えても、私にはあの時の答えを出すことはできない。一生わからないかもしれない。しかしその結論を出すのはまだ早い。私にはまだ時間があるのだから、気長に考えたとしよう。もしかしたら、今度こそ彼女が答えてくれるかもしれない。

大地を歩く人は天を自由に飛ぶ鳥に憧れた。鳥はもしかしたら、大地を走りまわる人に憧れているかもしれない。しかし、その足と翼を取り替えることはできない。だからこそ、鳥は大地を、人は天を見るのだろう。

以上読んでいただきました三つの文ですが、優秀作品その一を書いた生徒は「のりこえる」ことがテーマです。クラブのキャプテンなどをしていましたが、個人の生活面でも集団の中でも、人の悩みの相談も含めて、悩みや苦しみを乗り越えて来たのだと思います。

優秀作品その二を書いた生徒は、全ての事をまっすぐに受けとめ、しかも優しさを持った生徒でした。まっすぐに受けとめすぎてしまい、辛い時代があったのかもしれませんが。作品も独特の透明感を持っています。

優秀作品その三を書いた生徒は、自分の世界を強く持つ個性的な人でした。居場所は教室よりも図書館で、三年間で膨大な数の本を読みました。将来も本に関わる仕事を希望しておりました。作中人物も屈折感を持たせています。

本当に、文の中に自然にその人の素顔が出ることを実感します。また、素顔が出る文に出会える喜びが、私達教師の原動力となっているのです。

(かなざわ・ひろあき 京都府立西乙訓高校)

資料①

平成一八年度 国語表現

京都府立洛西高等学校 金澤 ひろあき

対象者 三年生 二四名講座 (四、六、七、八、九組選択)

I 類文系) 二単位

中心の課題

- ・自分を見つめて、言語化する。
- ・教材と現実をある程度対応させる。

日時	一年間の教材	行事や進路関係など(三年生のおかれた現実)
四月	・この講座を選んだ理由 ・教室で見えるもの (原稿用紙の基本)	新クラス発表 クラス役員決め 遠足 進路面談開始
五月	・小論文に向けて 感想文との違い - 小笠原亀男君の添削 (わざとダメな例を生徒に見せて生徒に添削させる) ・簡単な小論文一題	一学期中間考査 団体鑑賞 各クラブ引退試合等
六月	・絵から物語 物語を書くために必要な要素 ・デイベート 根拠を示す言葉で伝える ① デイベートルール説明	文化祭にむけて 演劇シナリオ選び シナリオ書き

七月	② チーム決め 一チーム四人 ③ テーマ選び 小学校で英語 賛成・反対など ④ 資料集め(図書館) ⑤ 本番 ⑥ デイベートを振り返って 韻文一 短歌作り 短歌選び 短歌から物語 韻文二 詩 千の風になって ① 原詩紹介・訳 ② 作詩 ③ 詩集作り ④ それぞれの「千の風になって」 詩集配布 ⑤ 詩から物語 ・自己アビールをしよう ・自己アビールの続き 自分の良いところを見つける あなたはどれだけほめられますか。 ① 自己アビール文	一学期末考查 行事・進路関係等 硬式野球甲子園・京都府予選・開会式プラカード持ち 文化祭への取組 補習 A O入試等
九月		二学期開始 文化祭・体育祭 指定校入試 就職試験 推薦入試
十月		二学期中間考查

日時	教材	行事や進路関係など
十月	② キャッチコピー作り - 自己アピールをひとことで ③ ベストコピーを選ぼう ④ 自己CMポスター作り	
十一月	・ 自己アピールの続き ⑤ 自己アピールプレゼンテーション ・ 小論文 環境問題など	推薦入試
十二月	・ オハシロンちゃんへの手紙 「サンタクロースは本当にいるの」 - 信じていたもの・大切なものについて	二学期末考査
一月	・ 「他者理解」について ① 課題マンガの文章化 ② 小論文 ・ 「良い人生」とは 加藤周一 ナボリの子供	センター試験 私学前期

資料②

私版 「千の風になって」

九、一テロの犠牲者追悼会で読まれたりして、この詩は有名になりました。（以前からアメリカでは、いろいろな追悼会等で読まれていたようです。）

不思議な詩で、題もついておらず、作者も不明です。

大切な人を亡くした時、残された人が悲しんだり、まわりの人が慰めたりという詩は多いのですが、この詩は「亡くなった人が残された人に呼びかける」という形をとっています。

日本では作家の新井満（あらいまん）氏が、「千の風になって」

Author Unknown

原詩

(A 1000 winds)

Do not stand at my grave and weep.

I am not there, I do not sleep.

I am a thousand winds that blow.

I am the daiamond glints on snow.

I am the sunlight on ripened grain.

I am the gentle autumun's rain.

When you awaken in the morning's hush,

I am the swift uplifting rush

Of quiet birds in circled flight.

I am the soft stars that shine at night.

Do not stand at my grave and cry.

I am not there, I did not die.

単語の意味

grave…お墓 weep…泣く winds…風

blow…吹く glints…輝き

ripened…実った grain…穀物

awaken…起こされる

hush…静けさ・しじま swift…早い

uplifting…すばやく

rush…急いで行くもの

quiet…静かな・鳴かずに

circled…旋回している・群をなしている

この詩の場合「I am」の「am」は「になっている」の意味になる。

という題をつけて、曲もつけてCDで出し、有名になりました。（尼崎の列車事故犠牲者追悼でも使われました。）ただし、「千の風になって」は新井氏独自の解釈で、原詩を大きく改変しているところもあります。

新井氏の「千の風になって」を参考にしながら、あなたなりに、この「詩」を翻訳してみましょう。

条件

一、「千の風になって」以外の題をつけること

二、自分が中心テーマと思うものにしほって、原詩を大きく改変してもかまいません。